



## 「ヘッドネーション」の先にある社会

私が仲良くさせていただいているベテランの男性教諭は、長髪を後頭部でキュッと結わえて、自転車で颯爽と通勤されていました。その姿は格好よく、素敵だと思っていたいました。その後しばらくすると、いきなり短髪にされて、「髪思いつきり切りましたね。」と尋ねると「ヘッドネーションにしました。」と答えてくれました。その時は、ヘッドネーションなど露知らず、その教諭に教えてもらいました。ヘッドネーションとは、病気で髪を失った子供たちに「ウィッグ」を作って贈ることを言います。最近では、ボランティア意識が高まり、髪を寄付する人が増えています。寄付の規定は長さ31cm以上になるようにカットされるそうです。その教諭は「髪を伸ばすことで誰かの役に立つのであれば、嬉しい。」と言っていました。このカットされた髪は、中国やタイでウィッグにされ、一つのウィッグを作るのに、最低50人分ほどの髪が必要だといひます。髪はトリートメント処理したり、染めたり乾燥させたりなどの工程を経て、ウィッグとなるそうです。



私は「そういう活動をされていて、素晴らしいですね。」と声をかけると、教諭は続けて言ひます。「本当は、こういう活動がなくなった方がいいんだけどね。違いがあってもそれを認め合うことで、自分を解放して生きていける社会が本当の姿なんだよな…。」その教諭からは、よいことをしたと思ひて終わりではなく、その先にある本質的な課題を見つめることの大切さを学ばせてもらひました。

## ●ひこうきぐも✧ vol.16

フランスからベルギーへと旅を続け、オランダのアムステルダムに着きました。アムステルダムに着くまでの列車の車窓からは、牧草を食む牛や羊の群れが見えます。また、その牧草地帯に張り巡らせたかのような運河も見え、遠くの方では風車がおもちゃのように点在しています。



さあ、運河と風車とチューリップ、そんなイメージでアムステルダム中央駅に降り立ったら、そのギャップに驚きました。どこか雑然としていて、インフォメーション辺りには、うさんくさい客引きがたむろしています。旅行中のドイツの青年が言うには、ここは置き引きで有名で、旅行者（特にバックを背に旅するバックパッカー）にとって危険な場所だといひのです。どうやら私の勝手なイメージの中のオランダに行くには、オランダの田舎町（後日ちゃんと行きました）か、長崎のハウステンボスに行くしかないようです。

このアムステルダムで私が最も印象深かったのは、アンネ・フランクの家に行った事です。アンネの日記は読んだことのある私でしたが、実際にその舞台となった家についての知識は、あまりありませんでした。ゲシュタポに発見されるまでアンネ一家が隠れ住んでいた裏の家（通称アンネの家）と、アンネ一家をかくまっていた家族の住む表の家とは、秘密の通路でつながれているのです。その通路の入り口は本棚で目隠しされているので普段は誰もその本棚の裏に通路があることは気づくこともないのです。しかも、その本棚は、回転式になっていて、回転させると通路の入り口が口を開く仕組みになっています。ここまでして身を潜めていなければならなかったアンネを想うとき、目の前の回転式本棚から、改めて戦争の悲惨さを実感させられました。

※「ひこうきぐも」は、あくまでも荒木が旅をした当時、約30年前の街の様子です。現在とは状況に違いがあることをご了承ください。